

目次

開会挨拶	P02
第一部：「アフリカと栄養」	P04
第二部：「難民と栄養」	P13
第三部：「オリパラに向けて ～地球市民として栄養・食・いのちを語ろう」	P21
交流会	P35

参考資料

開催概要 / プログラム

配布資料（内閣官房、外務省、農林水産省、JICA、GNR2017）



(司会) 鈴木馨祐 FAO 議員連盟事務局長

皆さま、本日は「議連合同による栄養シンポジウム：適切な栄養をすべてのお母さん、子どもたちに！」にお越しいただき、誠にありがとうございます。第一部「アフリカと栄養」の司会は私、鈴木馨祐 FAO 議員連盟事務局長が務めさせていただきます。

本日は多くの議連の皆さまにご協力を頂戴しております。まずは呼びかけをさせていただいた国際母子栄養改善議員連盟を代表し、逢沢一郎国際母子栄養改善議員連盟副会長より開会挨拶を申し上げます。



(開会挨拶) 逢沢一郎 国際母子栄養改善議員連盟副会長

本日の議員合同シンポジウムの開催にあたり、ご挨拶申し上げます。2020 年の東京オリパラの際に、栄養サミットが開催されることになりました。オリンピックでのアスリートのパフォーマンスのためにはまず栄養が大事。

今回のテーマは、「適切な栄養をすべてのお母さん、子どもたちに！」である。途上国の未来を切り開くことは、子どもたちにかかっている。そのためには乳幼児期の栄養が大事なのである。

他方で、世界では難民の問題が深刻化している。6,500 万人と言われる難民の人々は日々困難な状況に置かれており、難民キャンプにいる人たちに適切に、しっかりと栄養を供給提供することが重要と受け止めている。

こうした状況の中で本日開催されるシンポジウムは、第一部「アフリカと栄養」、第二部「難民と栄養」、そして第三部「オリパラに向けて～地球市民として栄養・食・いのちを語ろう」と題して 3 つのテーマの特集となっている。

本日のシンポジウムは SDGs の目標達成にも深くコミットしており、民間、市民レベルにも関心を持っていただきたい。政府としては、この SDGs2 目標を掲げているのである。このシンポジウムが是非とも充実したものとなっていただきたい。

また、本日のシンポジウムには、海外からも基調講演者をお招きしており、心から感謝申し上げます。本日ご参集の全ての参加者とともに、このシンポジウムが素晴らしいものとなるように祈っている。



(司会) 鈴木馨祐 FAO 議員連盟事務局長

逢沢先生ありがとうございました。本日のシンポジウムは、SDG の 17 項目の先頭に立つものです。逢沢先生の開催のご挨拶にもありましたように、2020 年オリパラは、ロンドンでの NFG においてブレア首相がイニシアチブを取ってスタートし、そのあと、リオのオリパラで促進し、2 年後の東京でさらに加速されることとなります。

ここで、高木厚生労働副大臣に来ていただいておりますので、高木副大臣一言ご挨拶をお願い申し上げます。



高木美智代 厚生労働副大臣（国際母子栄養改善議員連盟 ワクチン予防議員連盟 ストップ結核パートナーシップ推進議員連盟）

本日はお忙しい中、議連合同による栄養シンポジウムに、多数の皆さまにお集まりいただきました。おめでとうございます。

2020年の東京オリンピック・パラリンピックで、栄養サミットが開催されます。

今日を、栄養サミットに向けたキックオフとして、皆さま方のご協力をお願いしたいと思います。

本日のシンポジウムが栄養サミットに向けた世界の一歩となるようにお願いしたいと思います。本日は誠におめでとうございます。



【第一部】 アフリカと栄養



(司会) 鈴木馨祐 FAO 議員連盟事務局長

第一部の基調講演は、「アフリカと栄養」というテーマで、FAO 栄養ディレクターのアン・ラーティールさんと、ビル&メリンダ・ゲイツ財団から、ニール・ワトキンスさんとネマット・ハジーボーイさんをお願いしている。それではまず初めにラーティールさんお願いいたします。



アナ・ラーティール

国際栄養科学連合前会長・FAO 栄養ディレクター

「アフリカにおける栄養不良」という大切なテーマについて話すことができ光栄。

アフリカ関連の国際会議として、TICADVI がケニアで 2016 年に開催され、その際に、日本政府が栄養をテーマとして IFNA を立ち上げた。また、「成長のための栄養 Nutrition for Growth」のサミットが 2013 年〔ロンドン〕、2016 年〔リオ〕について、2017 年 11 月にミラノで開催され、2020 年には東京で開催予定。

さらに、2019 年には、TICADVII 横浜、2021 年 9 月に「100 億人のほほえみ」と題した国際栄養会議など、栄養に関する一連の会議が開催される予定。

チャートにより現状を説明したい。アフリカでは飢えて眠りにつく人が増えており、アフリカの発育阻害が発生しているのである。下の図の傾斜部分では、アフリカ以外の地域では減少しているのに、アフリカではそのペースが遅い事を示す。

アフリカでは、小児肥満の問題に加え、貧血の問題もある。母体の貧血が幼児の死亡の要因ともなっている。

紛争の問題も無視できない。社会が不安定だと進歩がない。緑の線は急激な減少を示しており、アフリカ以外の地域では、発育阻害が減少している。オレンジ色の部分はアフリカの状況を示しており減少してないことから、紛争が起きている地域は、明らかに発育阻害減少を目指すことは困難である。

次に、アフリカにおける急激で顕著な人口増加の問題があげられる。13 億人に膨れ上がる人口は、アフリカの課題の根底にある問題。また、人口増加問題に加え、都市化により都市における人口増加が問題となっている。

また、気候変動も、2030 年における課題の一つとなっている。

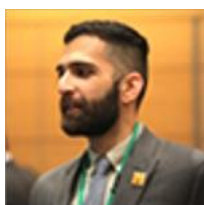
更に、食料システムに関する問題が、成人病のような形で、人々の健康に影響し始めている。アフリカにおける食料システムの変化を示す例として、砂糖入りの飲料水の消費が

増加しており、これが健康に与える影響も近年顕著である。砂糖入り飲料水の価格は西瓜一つの値段と同等で、2ドルである。どちらを選択するかこのような選択を迫られる形で、我々の食生活に、食料システムが影響を与えている。つまり、加工食品の消費、摂取が増加せざるを得ない食料システムがアフリカにも定着し始めており、ご覧のように、生活習慣病である肥満の原因となっているのである。



(司会) 鈴木馨祐 FAO 議員連盟事務局長

アフリカの栄養の現状について基礎的な情報をご教示いただいた。日本の貢献の方法については、幅広く対応できると思う。



ニール・ワトキンス氏

ビル&メリンダ・ゲイツ財団 副ディレクター 栄養（アドボカシー）

鈴木先生ありがとうございます。ゲイツ財団としても今日の機会はありがたい。SDGs、UHC については個人的にも思いが強いものがある。グローバルベースでは死亡者数は減少している。5歳以下の幼児の死亡数は600万人である。こうした中で、SDGs3では2030年までに死亡数を半減することを謳っており、幼児の死亡の45%は栄養不良によるものである。毎年600万人が死亡し、その45%が栄養不良によるのである。

すべての栄養サービスへの少ないアクセス、これについて先ほどの指摘にもあったように、50%がユニバーサルアクセスができない状況にあり、これへの対応が必要である。そのためには、当該政府、民間ドナーとのパートナーシップによる効率的な費用対効果の高いカバレッジが必要。一人の人間に対する実証済みの介入パッケージでは、新生児などの身長、体重の測定など難しい技術的な問題がある。今後、スマートフォンの活用、学校での使用なども考えられる。新たな技術面での対応がハイインパクト介入となるものである。世銀の分析によれば、介入のスケールアップにより、2030年にSDGsの達成が可能になる。

資金に関しては、栄養関係に対してODAは1%しか配分されていない。高負担国は、アフリカ、アジアに集中している。1か国のみでもなく、全世界のカバレッジが必要である。投資については、子どもへの投資が重要。投資においても栄養に優先度を置く必要がある。2012年の世界保健総会で設定された国際目標2025まで7年しか残されていない。



ネマット・ハジーボイ ビル&メリンダ・ゲイツ財団

副ディレクター 栄養（カントリーインパクト）

栄養問題に関するグローバル対応として、世界栄養ターゲットのあとに何をすべきか、今、何が始まっているのかが課題である。グローバル

栄養ターゲットについては、2012 年の 190 カ国による WHO 総会のターゲットとされているが、これは、SDGs2-2 にも入っており、これを具現化してグローバルベースではどうなるのかが課題となる。

世銀によれば、6500 万人の子どもの発育阻害（stunting）の防止、幼児期の 1000 日間おける栄養不良が、その後の認知症、先天性障害等の原因にもなるとされることから、280 万人の死亡の予防を達成することにより経済的な繁栄が可能であるとされている。本件は、エビデンスベースとしての対応とされており、社会、農業を含むマルチセクターの研究課題ともなっている。2013 年ランセットに掲載された論文においてハイインパクトが取り上げられているが、これからはこうした分野を重視することになる。世銀は、投資を通じた介入の分析フレームワークを構築しており、費用として年間 23 億ドルを要すると試算している。それに対するリターンは大きいものがある。

2013 年のイギリスでのサミット、2016 年のリオオリンピックの後の 2017 年のイタリのサミットでは、首脳によるコミットメントがなれているが、更なるステップとして、2017 年 11 月には、欧州、NGO による誓約があったほか、世銀からも誓約が出ている。2013 年のレポートでは、支援の役割、進捗のモニタリングを取り上げている。2020 年のサミットに向けた新たなコミットメントが期待されるところである。



(司会) 鈴木馨祐 FAO 議員連盟事務局長

この取り組みの政治的なコミットメントが大事であると考えます。安倍政権では SDGs にも強いコミットメントをしており、2020 年に向けて政府を揚げ、与野党もなく SDGs に取り組んでいるところである。

(パネルディスカッション)



松本剛明 国際母子栄養改善議員連盟副会長

皆さまのおかげで開催できることを感謝申し上げます。特にプレゼンテーションいただいた、アナ・ラーティさん、ゲイツ財団のお二人、ありがとうございました。ちょうど 7 年前になりますが、FAO のシルバ事務局長の就任が決まる時でありました。ブラジルと話をし、シルバ事務局長の就任を支援させていただきました。

今日はアフリカの状況について話をいただきましたが、実はこの会議が始まる前に外務省の方と一緒していました。自民党の中でも経済協力の会議の中でやはり母子の栄養というものがテーマになっています。すでに我々も、JICA ボランティアなどで保健などについて各国で様々な活動の展開をしています。今後 現地政府と連携してこのシステムをどのように定着させていくか我が国としてできることをさらに一歩進んで取り組みがで

きるよう議論をしています。先ほどもお話があったように、日本語で言うところの「待ったなし」時間がないという状況の中で、お話を通じて実感、そして危機感というものを、少なくともここにいる議員は感じ、また多くの議員と共有をしてみなさんのサポートをしていければと思っています。

ゲイツ財団においては、栄養についてではないのですが、7年前にパキスタンのポリオ根絶で「ローン・コンバージョン」の仕組みを作っていただきました。我が国が円借款を出してポリオ根絶の活動を実現をするとパキスタン政府が返還をするんですが、ポリオ根絶の成果が上がった分だけ、ゲイツ財団さんが借款を肩代わりしてくれるという仕組みです。我が国においても保健分野で借款、つまり債務で出すというのは初めての決断でした。私自身がさせていただきました。やはり、それぞれの使える資源、財政的な資源を使うことができるゲイツ財団さんと、ポリオ根絶のノウハウのある JICA をはじめとする我が国のグループが連携できているのではないかと思います。また栄養の面においても、先ほど話しましたが、我が国も各国で色々な実績があります。そういう意味でもゲイツ財団さんとパートナーシップを組んで具体的な成果が上がる方法を各国で進めることができるのではないかと思います。焦点を当てておられる5カ国も、我が国と大変縁の深い国がありますので、成果が上がる活動を展開できればと思いながら、お話伺っておりました。改めて私自身、様々な協力ができればと思います。ありがとうございました。



(司会) 鈴木馨祐 FAO 議員連盟事務局長

ありがとうございました。大変時間が押してしまっていて、55分までにあと7分15秒しかありませんので、私がディスカッションに絡むことは難しいと思います。

まず先生方から1分程度でそれぞれご意見を頂戴できればと思います。ではまず、古川先生から。お願いいたします。



古川元久 グローバルファンド日本委員会議員
タスクフォース共同議長

おはようございます。1分ということなので、もう本当に短く。私はグローバルファンドの議員タスクフォースの共同議長を、自民党の逢沢一郎先生と一緒にやっております。希望の党の古川元久と申します。

栄養という面では、三原先生にもお世話になっております。ダボス会議が開かれておりますが、世界経済フォーラムが2015年から始めたヤンググローバルリーダーの1回生で、その日本から選ばれた数人がファウンダーになってTABLE FOR TWOというNPOを立ち上げました。今日のお話にあるようなアフリカの子どもたちが、栄養の取れない状況、一方で先進国では、栄養の摂りすぎで、生活習慣病がどんどんと拡大しています。世界的なアンバランスを調整する仕組みとしてTABLE FOR TWOを立ち上げて10年が経過しました。

この NPO 立ち上げのきっかけは、私が共同議長をしているグローバルファンドは、エイズ・マラリア・結核という感染症の根絶を目指すものでございますが、このようなワクチンを打つ、薬を投与するというのは、当然体力がないと、ワクチンがないと逆に感染してしまうとか、あるいは、体力がないと薬の副作用で亡くなってしまうことがあります。まずは栄養を与えてあげなければいけないという話を聞いて、この NPO を立ち上げたのです。こういった意味でグローバルファンドを始め医療支援を行う、特にアフリカなどですが、母子の栄養というのは医療支援を行う上での、前提として非常に重要なものであると考えます。我々も党派を超えてサポートしていきたいと思います。本日も大勢の NPO の皆さんもお見えになっていますが、まさにそういう分野では NPO/NGO との連携が必要だと思っています。ぜひ、今後ともみなさんと連携をしてサポートしたい、責任を持って努力をしたいと思っています。ありがとうございます。



(司会) 鈴木馨祐 FAO 議員連盟事務局長

ありがとうございます。では次は日本・アフリカ連合 (AU) 友好議連の三原会長代行にお願いしたいと思います。



三原朝彦 日本・アフリカ連合 (AU) 友好議員連盟会長代行

皆さま、こんにちは。つい 3 日前、セネガルから帰ってきました。12 月に行われた UHC フォーラムが東京でありまして、マッキー・サルという大統領がはるばるセネガルから来られて、私も現場を見に行こうと思って行ってきました。UHC の一端として我が国が 2.9 ビリオン、29 億米ドルをコミットした中で、わずかですが、医療センターをやりたいということで、それを見に行ってきたばかりです。

栄養と保健というのは一緒に手を取ってやらないと、栄養を与えても寄生虫なども一緒になって摂取してしまう。それも根絶しなければならない。そういう面でも我が国が進める UHC、安倍政権でやろうというのは、有意義なことだと思っています。特に、東南アジアですと、十分に食べ物はある。しかし、今問題になるのはアフリカの特に紛争国です。もちろん栄養のことも考えるべきですが、南スーダンなどでは行ってみれば、緑があつて食物はありそうに感じます。もう一つ、セネガルに行った時に、議論したのですが、グローバルファンドは 3 つのエイズ・マラリア・結核の根絶をやっていますが、それに加えて、アフリカでは肝炎が問題になっているそうです。肝炎。これもやらないと、セネガルですと 10 人に 1 人は肝炎だとパスツール研究所の方に言われました。これが今後問題になるなと感じました。

栄養とサイドバイサイドでやらなければいけない、医療保健、環境の重要性を今一度強調したいと思います。



(司会) 鈴木馨祐 FAO 議員連盟事務局長
では、次は吉田先生。



吉田統彦 適切な医療を実現する医師国会議員連盟幹事

皆さま、おはようございます。ご紹介いただきました、衆議院議員の吉田統彦でございます。私はもともと医者でございまして、国会議員として議席をいただく前は ジョーンズ・ホプキンス大学の研究所におりました、エール大学と協力してガーナに医療ボランティアに行ったことがあります。手術を主体にしてアフリカの医師に指導をしたりしたわけです。その時にガーナは比較的アフリカでは豊かな方です。それでもアクラという都市から、北に上がっていきますと、栄養、ビタミン欠乏症で失明している子どもがいます。そういうのを見ると本当に、まだまだ地方に啓発が至っていない部分もある中、栄養自体も不足をしている部分がある。繰り返しますが、ガーナはまだ豊かな国です。それでもこのような状態があります。確かそれが 2008 年ぐらいだったと思います。その後もエール大学と協力して様々なボランティア活動が続けているようです。またこのような活動に若い方が興味を持つことが大事だと思います。日本では残念ながら、ボランティアについて若者が参加する文化は、私が暮らしていたアメリカと比べると、まだ行き渡っていないと感じます。そういったところも、本日は与党・野党の先生方がいらっしゃいますので、しっかりと進める努力をしたいと思います。

皆さまの活動に心からの敬意を表しまして、私の発言とさせていただきます。



(司会) 鈴木馨祐 FAO 議員連盟事務局長

ありがとうございました。時間は来ているのですが、約 1 分ではなく、厳密に 1 分で今後よろしくお願いいたします。神谷先生、石崎先生、左藤先生の順でお願いします。



神谷昇 子どもの未来を考える議員連盟

皆さま、こんにちは。自民党衆議院議員の神谷昇と申します。本日の栄養シンポジウム、ご盛会誠にありがとうございます。日本も非常に飽

食な国でございます、カロリーの自給率は約 40%。ところが、外食産業などで食事をしますが、その 2 割を残して、捨てているんですね。また日本では、一部の子どもさんが食事を食べられない。そういうことに対し、文科省とボランティアで食事の提供をしている。ですから日本でも、そういう状況があるということを我々は考えなければならないと思います。

今日は、自民党で 9 時から経協インフラについての会議がありました。栄養についてもございまして、またトイレを輸出する、また飲み水を輸出する、上下水道を輸出する、ということから感染症を予防するということも、今日考えました。もう一つは気候変動をどう防いでいくか。日本はパリ協定によりまして、2013 年に比べて 2023 年には 26%、二酸化炭素を減らすということがありますが、アメリカはウォルマートなんかが企業をあげてすごいわけですから、日本も国をあげて、そして企業をあげて、この気候変動に取り組んでいく、日本では気象の予想をする素晴らしいシステムがあります。このシステムを輸出して、災害時の被害を減災することにこれからも一生懸命取り組んでいきたいと思えます。どうもありがとうございます。



(司会) 鈴木馨祐 FAO 議員連盟事務局長
では、石崎先生お願いいたします。



石崎徹 AI(人工知能)やビッグデータ、IoT 等について利活用を促進するための若手議員連盟事務局長

衆議院議員の石崎徹です。素晴らしいシンポジウムありがとうございます。10 年前、財務省に勤務していました時に世界銀行の担当をしておりました。その時に日本政府は JFS はじめパーティカル・ファンドという資金を世銀に持っております。そういった資金を栄養分野に活用できるのではないかと思います。こういった資金も様々な機関を通じて使われており、その時は 2 億円ほどでしたが、先ほど松本先生から円借款の話がありましたが、日本政府はいろんな形で国際機関を通じた資金面での貢献をしているわけですので、それが栄養面にも渡っていくように私も取り組みたいと思います。1 分以内でございます。ありがとうございます。



(司会) 鈴木馨祐 FAO 議員連盟事務局長
では、最後ということで左藤先生お願いいたします。



左藤章 国際母子栄養改善議員連盟

大阪出身の自民党の左藤章と申します。私も教育を専門にしておりますので、母子の健全な成長、栄養についてもしっかりとやっていかなければいけないと思います。特にアフリカを含め、南スーダンの話もありましたが、食料を生産するためのインフラ整備を含めて、日本は支援を進めて、子どもの食事の支援をしなければいけないと思います。衛生面の問題もございます。これを含めて、しっかりとご支援していければと思っております。 ありがとうございます。



(司会) 鈴木馨祐 FAO 議員連盟事務局長

以上とさせていただきます。締めくくりとしまして、加藤寛子日本栄養士連盟会長からお話しいただければと思います。



加藤寛子 日本栄養士連盟会長

高いところから失礼いたします。皆さまからニュートリションとか栄養ということを知っていて、私が痩せたのではないと思うぐらい緊張しております。 本当にこのような機会に恵まれてありがとうございます。私は小心者ですので、文字を書いてきました。

基調講演とかパネルディスカッション共々、食に関しての注目に心がいっぱいになりました。そして、責任とこれからの行動をどのように押し進めたら良いかしっかりと取り組もうという気持ちが強くなりました。

日本では、スケールの大きいNHKのドラマに国事（国の事です）に奔走した西郷隆盛を取り上げられています。西郷隆盛の生涯を描きます。国事に関わる発端は、「誰もが平等に食べられるように」です。私やっぱり、「食べる」ことは重要なことだと思っています。「食べること」は「生きること」。ぜひ、皆様とかかわりながら、前進したいと思います。私ども栄養士・管理栄養士をぜひご活用いただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

このような機会を作ってくださったことを心より感謝し、お礼申し上げます。ますますのご発展をお祈りいたし、ご挨拶とさせていただきます。日本栄養士連盟会長、加藤寛子でございます。



(司会) 鈴木馨祐 FAO 議員連盟事務局長

ありがとうございました。加藤様にも大変簡潔なご挨拶をいただきました。ありがとうございました。ということもあり 1 分 30 秒押しだけでございました。心から感謝申し上げます。以上をもちまして、第一部を終わりとさせていただきます。続きまして第二部は「難民と栄養」ということで、木村弥生先生の進行ということで、よろしくお願いいたします。



【第二部】難民と栄養



(司会) 木村弥生 国際母子栄養改善議員連盟

司会が変わりまして、衆議院、自民党の木村弥生が第2部「難民と栄養」の司会を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。あらためまして本日はこのように皆さま、多くの方々がお集まりになり、すばらしい機会となりました。この機会に、難民と栄養について、特にセッションを設けてお話しする時間を頂戴できたことを心より感謝いたします。それでは、早速ではございますが、日々難民の方々の支援にご奮闘なさっている、国連パレスチナ難民救済事業機関、UNRWA より、クレヘンビュール事務局長にお越しいただいております。今パレスチナ難民がどのような現状におかれているのか、お母さん、子どもたちの栄養状態はどうか。最新の状況をご報告いただきます。



ピエール・クレヘンビュール UNRWA (国連パレスチナ難民救済事業機関) 事務局長

この機会を頂きありがとうございます。日本のコミットメントやパートナーとしてのご支援に感謝する。1953年以降、ご支援いただいている。国連加盟前から日本とのパートナー関係が続いており、昨日は重要な人に会った。外務大臣である。いい会合であった。

難民問題、1948年に70万人が国を捨てざるを得なくなった事から、今の西南地域へ逃れたのである。その後多くの進展があったが、自分の国が発展したと言う政治的な努力は進展しなかったのである。ガザ、シリアの紛争地域において、1950年にUNRWAの事業が始められたのである。

今日の議論は、食料供給の維持に関するものであるが、パレスチナ人は食糧支援を今、必要としている。ガザではブロックされており、以前は、ガザで8万人が食料支援を受けていた。全体で100万人がその恩恵を享受していたのである。自立している人にとっては、この数値は恥ずかしい統計数値である。雇用を求めている人々は、尊厳のある人々であり、食を貰っているのではないのである。列に並ぶ70歳の女性は、食糧供給よりも、現金により、自ら食料を購入することで尊厳が保たれるのである。

栄養の概念については、ニーズにこたえる必要がある。UNの特徴は心の栄養に力点を置いているのである。被がい者という目でこれらの人々を見てはいけないのである。権利を有するのであり、送金により、尊厳を有する人々を支援するのである。すなわち、教育の必要性が重要である、教育に関して、UNRWAは700の学校をアレッポとガザに有し

ている。ここでは、50 万人の子どもたちが教室で学んでいるのである。日本、カナダをはじめとするドナーが支援しているのである。この支援は、SDGs にも貢献するものである。子どもたちの心の栄養、教育、希望と未来の機会を提供しているのである。

今、米国が拠出金を削減すると決定しているが、530 万人を守るため、日本はパートナーとして協力していただきたい。



(司会) 木村弥生 国際母子栄養改善議員連盟

クレヘンビュール事務局長、ありがとうございました。こうした現地からのご報告を聞くことができ、まだまだ我々が取り組まなくてはならないことが多いということを再確認いたしました。それでは、引き続きまして、UNRWA で活躍する日本人でいらっしゃいます、清田明宏先生に、「日本として何ができるのか？」という視点を踏まえて、ご報告いただきたいと思います。それでは、清田先生、どうぞよろしくお願いいたします。



清田明宏 UNRWA (国連パレスチナ難民救済事業機関) 保健局長

清田と申します。よろしくお願いいたします。日本人ですので、日本語で話します。今、私のところの代表であるピエールが申しましたように、UNRWA は今 530 万人いるパレスチナ難民の教育・保健・健康、社会保障といった様々なサービスを提供しております。この 530 万人の難民と申しますのは、世界最大の難民集団です。シリア難民も 500 万人いますが、それより多いです。その方々は、難民の状態になってから今年でちょうど 70 年です。

1948 年にイスラエルが建国された時に、当時、歴史的なパレスチナの地から逃げて、ヨルダン・レバノン・シリア、パレスチナ、ヨルダン川西岸、そしてガザに逃げた方々です。ですから、当時の方はイスラエルが建国された時に避難されて、そのまま 70 年。530 万人と多いですけども、もう 70 年と長期間です。私は 20 世紀最大の負の遺産であるとも言っています。未だに解決されておりません。非常に厳しい状態です。

私の分野の健康・保健に関して、パレスチナ難民最大の健康問題は何か。つまり難民の方々がどういう形にしてお亡くなりになられるのか。ということを申し上げますと、7、8 割は生活習慣病。英語では life-style related disease です。その中で一番多いのは糖尿病、そして高血圧、心臓疾患、癌、それからタバコによる呼吸器疾患です。難民の方がどういう病気を持ってらっしゃるか、どういう健康問題を持ってらっしゃるかを考えると下痢ですとか、感染症であるとか、出産・分娩に関する時にお亡くなりになられることが多いと考えるかもしれませんが、違うのです。21 世紀の難民は生活習慣病が問題です。これはなぜかと申しますと、食べ過ぎて糖尿病になっているわけではなく、良いものを食べ過ぎて、高脂血症になり、高血圧になっているわけでもありません。これは単純に貧しいからです。貧しいと何を食べるかというと、安いものを食べます。私は今、ヨルダンのアンマンとい

うところに住んでいますが、アンマンで一番安くて手に入って、量が多いのは、パンなのです。だいたい 150 円払うと、パンが 3.4 キロ買えるんです。非常に美味しいパンなのですが、貧しい方はこのパンを大量に買うのです。政府の補助金が出ているから安い。貧しい方はパンばかりを食べる。そして、紅茶に 3 杯も砂糖を入れる。溶けるのだろうかというぐらい砂糖を入れて飲む。なおかつ、東京のように歩くようにはなっていない。東京というのは、どこ行くにも非常に歩かされますが、ヨルダンの街に行くと、あまり歩くところがない。歩道も整備されていませんし、車の方が優先なので、ジョギングするとはねられそうになる。そうすると運動もしない。貧しくてパンばかり食べて、紅茶に砂糖を大量に入れて、運動しないと人間はどうなるかという、太ります。人間太るとどうなるか、糖尿病のリスクが上がります。さらにタバコも結構吸います。そうすると血圧も上がって、肺癌とか他の癌になりやすい。ですから、糖尿病、高血圧、呼吸疾患、それから癌が増えている。貧しいから生活習慣病で 7、8 割がなくなっているということにつながっている。

栄養というのは非常に重要ですが、栄養にアクセスする、つまりどのようにして食べ物を得るかというのは、根源的な問題で、貧しいとその選択肢がない。偏った食事を取り、偏った栄養を摂取することになる。それが一番の問題です。私たち保健の分野では、生活習慣病に対して、対処するうえで重要なのは、その人を中心に人間的なケアをすること。ヒューマンセンター、つまり人間を中心にしたサービスを提供する。そういうことで家庭医制度を導入しました。日本でいう、かかりつけ医のようなものです。看護師さんも一緒にになってチームを作って、同じケアを続けていく。それから糖尿病・高血圧は治りませんので、一生のケアになります。電子カルテを導入しました。私たちは家庭医制度と電子カルテを導入した。そういうことを我々は一生懸命やっております。我々の糖尿病の管理する割合は、3 割から 4 割ほどなのですが、悪いのかと思い、糖尿病の世界的な専門家に聞くと「まあ、そんなもんだ。決して悪くない」と。糖尿病の管理というのは大変難しく、そうなるといくら一生懸命やっても管理が難しいから、当然落ち込む患者が現れる。「なぜ良くならないのか」と。きちんと精神的なケアをしていく。皆さんで助け合って、糖尿病の管理をやっていこうと取り組んでいます。家庭医・電子カルテの導入と、精神的なケアは、日本の援助によってやっております。誠にありがとうございます。これからもぜひ、この支援を続けていただければと思います。糖尿病も数は増えていますので、我々ももっと一生懸命にやっていくつもりです。

これは私の個人的な非常に正直な思いですが、糖尿病患者に対して、インスリン注射などをきちんと行いますが、ただ貧しい方がパンしか食べられず、太ってきて、タバコを吸って、糖尿病になる。という状況下で、インスリンをやって意味があるのか、思います。つまり、元の貧しいというところを押さえていけませんので、そうするとイタチごっこに、英語で言う、**Fire Fighting**。火消しに追われている。そこをどういう風に変えるか、これがうちの一番の問題で、今後も日本と一緒に根本的な問題解決をできればと思っております。非常に簡単な言い方をしますと「平和なくして、健康はない」「平和なくして、きちんと

した栄養はない」。70年間虐げられてきたパレスチナ難民に正義（Justice）がない限り、健康はない。健康がなければ栄養はない。

私は UNRWA に来て7年目ですが、一番感じたのは、社会全体が健康になって、初めて人々が健康になる。そこを理解しなければ、人々の本当の健康はやってこない。という風に思います。財政的に非常に厳しい。我々は決してあきらめず、パレスチナ難民のそばに立って、いろんなことを続けていきたい。彼らが本当の意味での問題解決できる日まで最後まで仕事を進めていきたい。そのためには日本政府にはさらなる協力をお願いしたい。昨日も河野大臣にお会いして、非常に好意的な、励ましの言葉をいただき、元気が出ています。今後もがんばって続けていきたいと思っています。ありがとうございます。



（司会）木村弥生 国際母子栄養改善議員連盟

清田先生ありがとうございました。「平和なくして、健康はない。そして栄養はない」また、貧困こそが根本であるというご指摘。まさにその通りだと感じます。私も看護師でございまして、医療職として糖尿病また生活習慣病の視点。また、お隣の衆議院、自民党の三ツ林先生も医師でございまして、医療職としての視点も活かしていこうと思いました。日本としてできることは数多くあるのでは、と意を新たにいたしました。それでは、フロアからの発言、ディスカッションに移らせていただきます。はじめに、UNHCR 国会議員連盟の会長である逢沢一郎先生よりご発言を頂戴いたします。逢沢先生、どうぞよろしくお願い致します。



逢沢一郎 UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）国会議員連盟会長

この機会を与えて頂きありがとうございます。私は、難民問題に真剣に取り組む UNHCR 国会議員連盟の会長をしております。難民は、6,500 万人と公式に言われており、地球の全人口の 70 億人に占める率は高く、120 人に一人は広い意味での難民とされている。家を追われているという現実をまず認識すべきである。1945 年以降 72 年経過するが、現在最も厳しい状況にある。ミャンマーのロヒンギャ問題、IS のパワーがダウンしたようだが、トルコ、ヨルダンにいる人々が、自国に戻れない中で、難民の子どもたち支えるのが基礎的教育と栄養というのは人間の安全保障の一丁目一番地である。パレスチナ、タンザニア、マラウイ、ジンバブエ、コンゴ、スーダンなどを回った。深刻な難民キャンプがマラウイにあり、UNHCR が中心になって、正に人間の安全保障である、食の供給、と教育の供給を行った。

米国の UNRWA への拠出金、半分の停止は衝撃なニュースであった。国際社会の協力に寛容な精神を発揮し、継続することは当然である。米国の政権が正しい軌道に乗るよう発言を続け、説得を続けなければいけない。6,500 万人の人々が、今も困難に有り、十分な食に到達していないことに目を向けつつ、2 年後の栄養サミット、SDGs に向けて頑張ろう。



渡嘉敷奈緒美 環境副大臣（国際母子栄養改善議員連盟 ワクチン予防議員連盟）

このような素晴らしい会議が国会内で開かれた。戦後日本も栄養との闘いで世界の人々から、サポートいただいた。母はそれを見て、栄養士になり活動してきた。その姿勢が問われている。2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けてしっかり取り組んでいきたい。

環境副大臣であります。環境面でも、栄養に対する感謝の気持ちが少なくなっている。世界の国の中で、子どもに栄養が行き渡らない国が多い。自分たちも変わっていく努力、世界の国々の栄養指導を普及させたい。



（司会）木村弥生 国際母子栄養改善議員連盟

国際母子栄養改善議連、パレスチナ議連の三ツ林先生お願いいたします。



三ツ林裕巳

国際母子栄養改善議員連盟 日本・パレスチナ友好議員連盟

クレヘンビュール事務局長、清田先生の話をついて、教育が重要で、栄養としっかりとした教育が必要であることが分かった。成人病が多く発生しており、手軽に、簡単に食べられる食品で糖尿病が発生している。

教育が必要だ。

自分も医師として日本でも栄養教育、食育をやっております。パレスチナの難民の子どもにも栄養を取るための教育が必要。米国の拠出金が減り危機的な状況であるが、どんな時でも常に一定程度の支援が送られることが重要。日本もその中に入っていくことが必要。一国が減らしたことで救済が滞るようなことがあってはいけない。一議員であるが頑張っていきたい。



（司会）木村弥生 国際母子栄養改善議員連盟

国際人口問題議員懇談会の生方先生お願いいたします。



生方幸久 国際人口問題議員懇談会（JPFP）

自民党の先生が多いが、出来たばかりの立憲民主党に所属しており。現在 6 期目。また国際人口議連に参加しております。今日は、栄養のテーマである。途中からの参加であるが興味深く拝聴しておりました。自分は 1947 年生まれで、日本も栄養不足の時代であり、給食では脱脂ミルクが出された。自分はそれを飲むのが苦痛だったが、団塊の世代はそれで育っていました。脱脂ミルクの多くは米国からの援助物資でした。従って、その国でとれない物資は、外国からの援助に依存するしかないことは身にしみてわかっている。

清田先生のおっしゃる、平和なくして健康無し。社会が健康でなければ。比較的状况のいいところから、ひどいところまで見て来た中で、一番つらい思いをしていたのは、お母さんと子供たち。アフガニスタンでは、郊外の小さな石の下に小さい命が眠っているのを見てきた。たくさんのお墓があったのをすごく覚えている。

難民キャンプも大事であるが、スラム問題も重要だ。アジアのスラムは減ってきているが、タイは今では中進国になったが、タイのバンコクでもスラムがあったが、今は小さくなっている。ブラジルでもそうである。フィリピンのマニラ郊外にもスラムがある。貧困のため、スラムに行かざるを得ないのである。スラムには支援が届かないので当事国の政府の努力が必要になる。難民の問題と同時にスラムの問題も大事。とりあえずは、栄養の問題は金と食事を供給し届けることから始めて、パンも与えられなければ栄養失調で死亡してしまう。

難民の日本の受け入れは非常に数は少なく私自身は情けないと思っているが、受入と同時に多国への援助をやっていくべきだ。よろしくお願いいたします。



（司会）木村弥生 国際母子栄養改善議員連盟

ガザにいらしたことがある、興水前衆議院議員お願いいたします。



興水恵一 前衆議院議員

公明党の興水です。一昨年、ガザ地区に行きました。閉鎖の中で、学校、将来に対する夢に感動した。日本人として頑張ろうと思いました。学生が「日本人が私たちを忘れないで見てくれている」と言う事に感謝していました。ガザも焼野原かもしれないが、日本のように、復興するという気持ちであった。

今日のテーマは重要だと思います。まさに栄養が、単純な栄養だけでなく、心の栄養、教育、頭の栄養、トータルベースで整うことが一人一人の成長につながると感じている。

特に私が感じるのは、国際社会の皆さんが栄養不足の現実を目を向けることである。国際社会が、同じ人間として、苦しい人たちへの心の栄養、頭の栄養、ディーセント・ワークなど、トータルな支援が必要だと考えることが必要だ。日本国憲法に「われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有する」とある。そんな日本が世界に貢献する、議論するのは大変いいと思う。シンポジウムがあらたな一歩になればと思う。



(司会) 木村弥生 国際母子栄養改善議員連盟
阿部俊子先生宜しくお願い致します。



阿部俊子 国際母子栄養改善議員連盟事務局長
今朝も経協インフラ部会で 2020 年の栄養サミットについても議論された。JICA、農林水産省が総合的にやると発言していた。このような体制づくりを日本はやっていききたい。



(司会) 木村弥生 国際母子栄養改善議員連盟
日本・パレスチナ友好議員連盟幹事長を務めてらっしゃいます大野先生にもお話を伺います。



大野元裕 日本・パレスチナ友好議員連盟幹事長
パレスチナ議連幹事長を務めております。今日は参議院本会議が終り次第駆け付けました。世界の栄養問題について大変懸念しています。
中東には、13 年住んでいたが、現在、以前と比べてひどい状態である。
UNRWA への拠出金問題については、日本もこの 10 年間で減額になっている。不満が不安定につながり、子どもたち、お母さんたちの健康、そして命を阻害していくと思う。大変懸念している。2 回戦争経験してきた、お母さん子どもに我が国が裨益する支援をしていきたい。



(司会) 木村弥生 国際母子栄養改善議員連盟
衆議院議員の城内議員よりよろしくお願い致します。



城内実 親子断絶防止議員連盟

父は 1934 年生まれですけれども、戦争が終わり、父の姉は結核と栄養失調で、若干 16 歳で 1948 年に亡くなっています。戦後、日本の栄養問題の改善として、わが国では、キッチンカーが町に繰り出して、改善に役立ちました。今は健康寿命の問題があります。こういった日本の知見が UHC、SDGs に貢献している。元外務省職員、元外務副大臣としてサポートしていきたい。



(司会) 木村弥生 国際母子栄養改善議員連盟
衆議院議員の高橋議員よりお願いいたします。



高橋千鶴子 ストップ結核パートナーシップ推進議員連盟

衆議院議員、共産党の高橋です。私はストップ結核パートナーシップ推進議員連盟に所属させていただき、訴えてきました。国会に来る前、県議をしており、当時は結核の病棟が減ることに対して大変懸念し、訴えてきました。その後 WFP 議連にも参加し、SDGs の達成に向けて我が国として何ができるのか・何をすべきか今日は勉強させていただきました。貴重な機会をありがとうございます。



(司会) 木村弥生 国際母子栄養改善議員連盟

クレヘンビュール事務局長、清田先生に盛大な拍手を。以上で 2 部は終了ですが、第 3 部開始まで 10 分間休憩します。その間、動画をご覧ください。1000 日の栄養の重要性や難民の子どもたちの状況についての動画です。

【第三部】オリパラに向けて 地球市民として 栄養・食・いのちを語ろう



(司会) 木原誠二 SDGs 外交議員連盟事務局長

第3部の司会を務めます。木原誠二と申します。SDGs 外交議連の事務局長も務めております。まず、司会でもあるが出入りがあることからまず羽田先生からご挨拶いただきたいと思います。



羽田雄一郎 ユニセフ議員連盟事務局長

こんにちは、ユニセフ議連の事務局長を務めております、羽田雄一郎です。保育士資格を持った男性議員は珍しいと思うが、子どもの命を守り、潜在能力を発揮し夢をかなえ社会に貢献していくためには、赤ちゃんの栄養が重要。子どもの最初の 1000 日間は重要であることが分かってきた。この時期に赤ちゃんの脳が目覚ましく成長する。この時期の栄養がその後の人生を大きく左右する。また、低栄養は母親から子供へと世代を超えて受け継がれてしまう。栄養不足の母親からは小さく、感染症に弱い赤ちゃんが生まれる傾向にあり、疾病率や死亡率が高まる。このように栄養不良は、さまざまな影響を赤ちゃん、社会に与える。ユニセフ議連事務局長として、ユニセフとしては、人生の最初の 1000 日間に焦点を当て、子どもたちの命を守り、その後の成長を支える適切な栄養とケアを与える事業を、JICA や日本政府、企業では武田薬品など民間企業とともに取り組んでいる。過去2回のオリパラでは、ホスト国のイギリス、ブラジル政府が、オリパラの機会を活かして栄養ハイレベルイベントを主催し、国際議論を牽引してきた。このプロセスを受けて、ここ日本でも、東京オリパラが開催される 2020 年には安倍総理が言われたように、栄養サミットを開催しようということである。こういう機会を得て、しっかりと、日本、産学官が連携し、また UNICEF はじめとした国境を越えた多様なパートナーの戦略的な連携を強化して、今後とも世界の母子栄養改善に向けた強いリーダーシップを発揮していけるように議連としても後押しをしていきたい。この第3部では、2020 年オリパラに向けた議論が活発に行われて、各省庁や企業の実践を聞かせて頂けるということですので楽しみにさせていただきたい。よろしくお願いいたします。



(司会) 木原誠二 SDGs 外交議員連盟事務局長

それでは、3 部は東京オリパラというということで、2020 年に向けても取り組んでいく。冒頭キックオフを今日は農水副大臣である谷合先生によりよろしくお願いします。



谷合正明 農林水産副大臣 (WFP 議員連盟 UNICEF 議員連盟 UNHCR 議員連盟 ワクチン予防議員連盟 グローバルファンド日本委員会議員 タクスフォース ストップ結核パートナーシップ推進議員連盟)

農水副大臣の谷合です。今日は、朝から活発な議論がなされており、まずもって主催された議連の皆様、ご出席の皆様にご心からお礼申し上げます。今日のセッションを機に素晴らしい成果を残していきたいと思っておりますのでよろしく。私は政府では農水副大臣ではありますが、超党派の議員連盟、WFP 議連、UNICEF 議連や UNHCR 議連など国際機関の関係の議連で仕事をさせていただいている。

もともと議員になる前には岡山にある医療 NGO である AMDA の職員であり、アフリカやアジアのフィールドで仕事をしてきており、子どもたちの栄養、貧困問題に従事しており深い関心を持っている。今、与党公明党でも SDGs 推進委員会の議長もしている。SDGs のゴールの中でも、飢餓削減が取りあげられており、栄養、フードロス削減が決められているところである。いかにこの問題、途上国国内において進めるのか大切と思っている。これは、一つの役所でできる話ではできないので、省庁横断的に連携が必要であり、また行政だけではできないので、官民連携が大事である。また、日本だけではできないので国際連携していくことが必要である。戦後我が国は、UNICEF や世銀から、我が国の、例えばこどもの栄養改善のために資金援助を受けてきたという歴史もある。これから 2020 年の東京オリパラに向けて我が国としてどう貢献していくかということですから、まさに戦後の歴史に鑑みまして我が国として大きく貢献できると思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。



(司会) 木原誠二 SDGs 外交議員連盟事務局長

農水副大臣というお立場も超えてまたご参加をお願いしたいと思います。それでは、2020 年東京オリパラに向けてということでもあります。ここで栄養面でキックオフをしたいと思う。

それでは、最初の基調講演は、SUN、市民社会連合のキャサリン・リチャードさんお願いします。2017 から見える 2020 年は、というテーマでお話いただく。よろしくお願いいたします。



キャサリン・リチャード SUN 市民社会連合副議長

現在、Scaling Up Nutrition (SUN) 市民社会ネットワークの副議長として、またセーブ・ザ・チルドレン英国の飢餓と栄養部門の部長をしている。SUN は、世界 40 か国、2,500 以上の組織が連携し、栄養改善活動に国家レベルで取り組んでいる。セーブ・ザ・チルドレンは 120 以上の国で活動している。

本日は、なぜ栄養改善のための活動に取り組まなければならないか、セクター横断型のアプローチを確認し、市民社会がこれらの活動にどう貢献できるか、最後に、2020 年の栄養サミットを成功させるための取り組みについて説明する。

まず初めに、栄養は命の危機や死に直結する。子どもたちは、適切な栄養を摂取できないと、病気や死の危険にさらされる。特に生後 1000 日間、もしくは 2 歳の誕生日を迎える前の栄養改善に介入できれば、子どもたちはより長く健康に生きられる。

栄養に関しての進捗は、1990 年代以降、栄養不良の子どもの数は減ったが、現在も 1 億 5,500 万の子どもたちが栄養不良の状態である。このままの状態が続けば、2030 年までに 1 億 2900 万の子どもが栄養不良状態に陥ると試算されている。さらに、2016 年、8 億 1500 万人の人々が飢餓状態にあった。これは、栄養の課題が、飢餓や紛争、ドラッグや洪水など様々な要因を含んでいる。過体重の子どもの数も増え、栄養過多による肥満の問題がある。このような問題を抱える子どもは、世界に 4100 万人おり、20 年前に比べ 1000 万人増えている。

目標達成のためには、私たちは継続的な会議を重ね、持続可能な開発目標 (SDGs) の目標 2 と、2025 年国際栄養目標を達成していく必要がある。母乳育児をする母親の数は増えているなど進歩もある一方、2025 年国際栄養目標の 5 指標のうちの 1 つにある貧血症状を抱える女性は増えている。肥満と過体重の増加の上昇を止めることは難しく、目標達成が厳しい状況である。さらにデータ不足という課題もある。日本を例にとると、女性の糖尿病のみで改善が見られる一方、男性の糖尿病は改善されていない。貧血、過体重、肥満に関しても改善が見られていない。ここでもデータが不足している点が課題である。発育障害、消耗症、5 歳以下の子ども過体重の割合、母乳育児をしていない母親に関するデータがない状態である。

最新の『世界栄養報告』では、食料・栄養の問題は、健康、教育、雇用、貧困、不平等などにも影響を及ぼすことから、それへの対応は人間開発の中心的な役割をはたすことから、セクター横断の取り組みが必要。SDGs 全体の目標達成のため、包括的なアプローチ、公平性確保、衡平性の目標の達成重要である。

こうした中、世界銀行は、貧血、発育障害、母乳育児、過体重などの栄養課題への取り組みに関する資金面での大きな課題を指摘している。2025 年国際栄養目標を達成するためには毎年 70 億ドルの追加投資が必要である。資金確保には、ドナーによる支援、国内資金

動員等総合的アプローチが必要で、国ごとの個別の状況にあった栄養改善プロジェクトのために財源を確保する必要である。

富裕層と貧困層、都心と地方、さらに民族間、国家間での不平等問題に対して、誰一人取り残さないように SDGs を達成する必要がある、それには介入・支援の優先順位付けが必要である。新生児は特に優先度が高い。中でも女児の新生児は、これまで公共の保健サービスの対象から除外されてきた。また生後 1000 日以内の子どもたちにも着目する必要がある。

栄養課題に取り組む市民社会として、日本のサポートに対し改めて謝辞をお伝えする。SUN の栄養改善の取り組みの目的の一つは、国際機関、各国政府、市民社会、ビジネス、研究者、各国政府などの関係者が連携し、栄養不良に対する戦いである。SUN は、草の根的な活動を行う市民社会ネットワークで、世界中の支援によって支えられおり、栄養に関する活動は、健康、農業促進、清潔な水、衛生などの分野について、様々な形で行われている。セーブ・ザ・チルドレンは、すべての国において栄養不良を防ぐため、政府と連携し、持続可能な政策と解決策を提案するため、世界中で活動している。

2020 年栄養サミットへの期待は、野心的な目標を設定の下で、全ての政府、セクターによる「SMART」（Specific-具体的、Measurable-計測可能、Achievable-達成可能、Relevant-適切、Time Bound-期限が明確）な投資が必要である。栄養分野に 1 ドル投資するごとに、約 16 ドルのリターンがある。栄養への投資は経済効果が高く、サミットは強い投資の契機である。サミットを通してすべての人がアクションを起こす必要である。

日本の役割は、市民社会、投資家、研究者、ビジネスなど様々なステークホルダーの連携とそれぞれが重要な役割を果たすこと。SUN も同様である。議員連盟の皆様の役割も非常に重要である。議員の参加に関連する動きの例として、10 月にジュネーブで行われる議員会合なども参考にさせていただきたい。ともに活動し、2020 年の栄養サミットを必ず成功させよう。



（司会）木原誠二 SDGs 外交議員連盟事務局長

リチャードさん、キックオフを受けての最初のスピーチありがとうございました。それでは、パネルディスカッションに入りますが、本来であれば、省庁や企業の皆さんから取り組みのご発表をいただくところですが、ご参加の議連の先生方には、多少出入りがあるようですので、どうでしょう、まず初めに藤末先生お願い致します。

（パネルディスカッション）



藤末健三 世界の子どもたちのためにポリオ根絶を目指す議員連盟事務局長

ポリオ根絶議員連盟の事務局長をしている。ポリオをなくそうと活動している。取り組んできてもう少しでゴールになる。1980年代には100か国以上の国にポリオがあったが、残りは、現在は、3か国、パキスタン、アルジェリア、アフガニスタンとなった。何とか2020年オリパラの年に根絶宣言したい。それが一つのゴールである。

2年前、パキスタンに行きました。ポリオの予防接種の現場に行ったんですが、Lady Worker Network といまして、町の主婦の代表たちを教育をすることで、予防接種とか衛生のネットワークを作っていた。もともと予防接種の考えがなかった状況でした。今日は、こうしたネットワークを使えばいいのではないかと、ということで今日は参加させていただいた次第です。皆様に協力したいと思う。



(司会) 木原誠二 SDGs 外交議員連盟事務局長
石田先生お願いいたします。



石田昌宏 国際母子栄養改善議員連盟事務局次長

参議院議員の石田です。自分はもともと看護師であり、医療の仕事に従事してきている。その観点から見ても、今この豊かな日本でも、かなり健康問題、子どもの低栄養状態を見えています。日本では、家族や社会含めた教育の問題もあり、日本でもこの問題がまだまだであると思う。このことは、世界でも同じことが言えるわけで、教育が大事であるということである。データもありがとうございました。世界の目標達成にとってデータ不足で評価できないという問題をリチャードさんが指摘されているが、これは、重要な課題である。



(司会) 木原誠二 SDGs 外交議員連盟事務局長

次に JFPF の副会長でもある増子先生、NPO 議連の中谷先生、お願いいたします。



増子達彦 国際人口問題議員懇談会（JPFP）副会長

国際人口問題議員懇談会（JPFP）の副会長、併せて、公益財団法人アジア人口・開発協会（APDA）の理事の増子です。今回は「適切な栄養をすべてのお母さんと子どもたちに届けよう！」というテーマで開催されたことはうれしいことです。議連合同シンポジウムの盛会と熱心に活動されている皆様に改めて感謝と敬意を表したいと思います。

JPFP は 1974 年に設立され、持続的開発の達成についての世界で最初の超党派議員グループである。JPFP ができた当時、人口の急増、それに伴う貧困と飢餓、健康状態の克服が最も重要な課題であった。その活動理念は、望まない妊娠による人口が増え、それにより地球環境問題、食料安全保障問題に対して、国会議員が対処しなければならない、日本の活動は、JPFA の活動の開発問題を先取りしてきたことは過言ではない。

持続的開発という概念は、国連の世界委員会、通称、ブルントラント委員会が 1987 年に発行した最終報告で世界的に知られるようになったが、これは、日本の提唱で作られたこともまた事実である。今回の会議のテーマは栄養である。これは結果として、身体に取り込まれる食料、質の食料安全保障ということができる。栄養不良は地球規模の深刻な問題であり、特に、子どもたちに大きな影響をもたらすということである。きちっとした栄養をとり、子どもが健康に生まれ、望まない妊娠を防ぐことが大変重要と思っています。かつて JPFP で始まった開発に関わる活動が、今、大きな分野に分かれ、いろいろ広がっていることはありがたい。希望ある未来のためにも、我々、国会議連の責任ある選択と取り組みがますます重要となってくると思います。このような視点から、昨年 9 月 APDA がインドで開催したアフリカ・アジア議員会議では、国会議員活動を、政府、企業、市民社会と並ぶ SDGs の 4 番目の柱として位置付けた。持続可能な開発を達成し、人間の尊厳の保たれる社会の達成が、ここにいる議員、関係者の皆さんの共通目的だ。我々は、議連の枠を超えて今後も連携しながら、有機的にこの活動を推進していけたら、と念願している。本日のセミナーの成功を祈りながら、皆さんとともにしっかりと活動して参りますので今後ともよろしくお願いいたします。



中谷元 NPO 議員連盟共同代表

NPO 議連会長の中谷元です。日本の NPO は 20 年の歴史があり、1998 年に制度が始まり、法律を作った。議連としても活動しているが、NPO の数は、当時は 23 団体しかなかったが、現在 51,779 法人まで増え、うちで認定法人は 1,056 団体になっている。活動分野は 20 以上あり、栄養改善においては、Save the Children、ワールドビジョン、日本リザルツ、栄養不良対策行動ネットワークなどの皆さんが、NPO 法人、公益社団法人として活動していただいている。

日本では、平均年齢は 83.84 歳で、女性は 87 歳、男性は 80 歳で、世界 1 の長寿国。これは、食育、食べ物が支えている。子ども、成人病予防、保健・健康対策、中でも、母子手

帳、給食制度など、日本独自の制度があり、これを海外、特に東南アジアへ供与している団体もある。

このほか、最近は、子ども食堂、子どもの栄養を心配するお母さん方が集まって食事を提供する、安全な水、カロリー、特に日本食がバランスがとれているということで、これを世界遺産にしようという NPO もある。各国にこの制度を普及している団体もある。日本の良いところを積極的に世界に広めている団体もある。NPO は、SDGs の精神と一致しており、誰一人取り残さないという観点で、現在も、様々な活動をしている。NPO 議連としても、成長のための栄養、N4G サミット、2020 年日本開催の成功のため、心から支援をしていきたいので、皆様方からもご指導いただきたいのでどうぞよろしくお願いいたします。



牧山ひろえ ポリオ根絶を目指す議員連盟事務局次長

民進党神奈川参議院議員牧山です。今日はありがとうございます。議員であると同時に、二人の子どもの子育てをしてきました。子どもの命を守るのが私の政治的活動において大きなテーマ。先程、藤末先生から話のあったポリオの議連も一緒に行動してきた。国連人口基金のさまざまな活動を国会の中で紹介する活動もやってきた。アムネスティの事務局長もしている。増子先生から最近ご紹介いただいて国際人口問題議員懇談会にも入れていただいた。

国連人口基金の勉強会を繰り返し国会内で開催してきたが、世界各地でどうやって母子保健向上をはかるか、小さい子どもが本当に沢山亡くなっている国々で、特にそこで働く NGO の方々に定期的に来ていただいて、現場の事情を説明をして貰うという活動をしている。また、ケーススタディーとして、死亡率が高いと言われているアジアの中では、東ティモール、ラオスでは、地域によって事情が違うが、詳しく調査をし、ケーススタディーを行った。その中で、例えば、ラオスでは、医療、衛生面をどう思うかという提言を行ったこともある。その時には、壁にぶつかったこともあり、文化的背景、地域の習わし、栄養面で我々が思うことを言っても、その地域、地域により、生まれたての赤ちゃんにもち米を与える、そうするとどのどにつまるという問題、妊産婦に対しては、地域によって、風習や宗教によっては妊産婦には水以外与えないという所もある。出産後は水しか与えない、それ以外は毒というところもある。そこにどういうふうに対応していくかは大きな壁である。風習とか文化もあるが、こうした問題にどう取り組むかを、皆さまで考えていかないと乳幼児の死亡率も一向に改善しない地域もあるので、皆さまと一緒に取り組んでいきたいと考えている。今日はありがとうございました。



(司会) 木原誠二 SDGs 外交議員連盟事務局長

今、猪口先生が見えたのでご挨拶を頂戴したいのですが、まだいらっしゃれるようでしたら、この後の方々のお話を聴いていただいた後に、コメントをお願いできればと思います。

それでは、各省、企業様から簡潔に発表をお願いします。まず初めに外務省よろしくお願いします。



鈴木秀夫 外務省 地球規模課題審議官（大使）

外務省地球規模課題審議官の鈴木です。栄養サミットについてお話しします。既に栄養サミットの内容についてはいろんな方からの説明があったので割愛します。外務省としては、関係省庁、市民社会その他のステークホルダーと連携して、その成功のために全力尽くして、今準備していることを報告いたします。

内容的には、ロンドンでの最初の会議の成果を踏まえて、それに日本らしさというものを付け加え、より豊かな国際社会の未来像を提示していけるようなサミットにしていきたい。国内的には、関係省庁、市民社会との連携もある。国際的には、先輩のイギリス、次のオリパラ主催国のフランス、ここにご出席の国連機関、ゲイツ財団、市民社会、NGO との共催あるいは連携について検討している。出席者は 300 名程度を想定。首脳、閣僚その他多くの方々の積極的な参加をお願いしたいと思っている。

何を達成するかは、2 枚目の資料に指標を並べている。これらは WHO などで定められた様々な指標であり、その一部は、ゲイツ財団、SUN からも説明がありました。大変重要な指標ではあるが、数値目標達成だけでは十分ではない。石田先生からもご指摘のように、教育の重要性、ファストフード、炭酸飲料は美味しいし、安価だが、そればかり購入してはだめ、もっといいものの購入も必要だ、あるいは、UNRWA さんの cash 支援に展開された、何を買うのかをきちんと教育する、理解するための教育、これを理解することが大事で、そのための基礎的な教育を重視していく。また SDGs の観点からは、企業の側も短期的な利益ではなく、持続可能な食品といったものを開発していくことをお願いしなければいけないと思う。そういった企業をどんどん巻き込んでいく、そういうプラットフォームを作っていく、これがサミットの目標でないかと思っている。



(司会) 木原誠二 SDGs 外交議員連盟事務局長

では続けて内閣官房をお願いします。



藤本康二 内閣官房 健康・医療戦略室次長

健康医療戦略担当の藤本です。1枚の紙にもとづいて、現在、日本政府として、外務省、厚労省と一緒に取り組んでいる一つのテーマについてお話したい。

オリンピック・パラリンピック栄養プロセスにおいて出された英国のイニシアチブ、NFG に呼応して、2014年に策定された健康医療戦略の中に、2020年東京オリパラに向けて世界的な栄養改善の取り組みを強化することについて、日英共同声明の中で確認したことを受けて、日本の優れた栄養強化食品などの研究開発力を活かして、新興国途上国を含む各国の栄養改善のため、官民連携を通じた包括的ビジネスを含む国際展開を進めることが閣議決定されている。

これを踏まえて日本政府もサポートしており、2016年に栄養改善事業推進プラットフォームが発足している。これは、JICA、食品産業センターが共同議長を務め、日本の企業を含め、官民共同でやっていこうということで、これを日本政府も支援していくということ。これを一つの栄養という形でのテーマのプラットフォームとしつつ、今高齢化が進むアジアが社会の中で、この栄養を含めて考えていかなければいけないということで、アジア健康構想を提唱しており、この栄養部分を担ってもらおうと考えている。栄養だけに限らず、正しい食事ということセットで行っていくということである。



(司会) 木原誠二 SDGs 外交議員連盟事務局長
では続けて農水省お願いします。



佐藤正 農林水産省 大臣官房 参事官

国際部の佐藤です。世界の食料安全保障に貢献する国際協力の推進という資料3枚紙がある。それに、冒頭、谷合副大臣から、関係省庁との連携という話があった。外務、JICA、内閣官房など関係機関と取り組んでいるが、今日は、特に、国際機関への支援という事でお話しします。

農林水産分野で、飢餓、貧困対策という事で、アフリカなどのコメ、豆、イモ、栄養改善セミナーに取り組んでいる。

おめくり頂きまして、2番目の上半分が WFP への拠出事業であり、コメ生産の農家への技術研修と併せて栄養に関する知識の啓発活動、下半分は国際的な農業研究所の中にある国際熱帯農業研究所への拠出金で、豆類、ささげの高栄養品、ヤムイモの増産に取り組む研究所への支援である。

3枚目は、食品事業者による事業であるが、これはFAOへの拠出金であり、今日、第一部で基調講演されたラーティエ部長の担当の部署への拠出金事業である。これは、現地食品事業者を対象に生きたカリキュラムを作成し、アジア、ベトナムでのセミナーを開催、多国にも、eラーニングシステムを構築するというものである。

その際、内閣官房からも栄養改善事業推進プラットフォーム（NJPPP）の話があったがそのことも連携し、日本企業の知見や技術の活用を考えている。



(司会) 木原誠二 SDGs 外交議員連盟事務局長
では続けて財務省お願いします。



吉田昭彦 財務省 国際局開発政策課長

主に世銀に一番近い立場にあるので、二つの取り組みを紹介したいと思います。一つ目は、SUN 信託基金がある。2009年から3フェーズに分けて支援しており、現在進行中のフェーズ2で、2016年は、2000万ドル27件を支援し、国家戦略栄養改善策定。実施体制支援です。

もう一点は、GFF、世銀・国連のイニシアチブであり、26の国を対象に取り組みの一環として栄養改善も関係している。

財務省は、こうした取り組みを着実に実施することを通じて、他のステークホルダーと連携し、皆様と共に進めていきたい。



(司会) 木原誠二 SDGs 外交議員連盟事務局長
では続けて厚労省、JICA、味の素ファンデーションの順でお願いします。



正林督章 厚生労働省 健康局健康課長

正林です。厚労省は、妊婦、子ども、成人、高齢者全てのライフステージに渡ってそれぞれ課題に対する健康施策を進めてきました。

歴史を振り返ると、かつて、終戦直後、栄養、食料不足に悩まされた。最初にやったのは、日本人は栄養上、何が不足しているのか、何を食べ

たらいいいかが分かったので、例えば、栄養士とか様々な専門職に活躍頂いて、栄養の相談、指導などを行ってきました。

特に注目すべきは、母子保健活動。1才半、3才児検診など、特に、母子健康手帳がある。その中には様々な情報が入っており、お母さんが読めば何をしたらよいか分かる。特にグラフが入っており、赤ちゃんの身長・体重をプロットし、ちゃんと成長しているかどうか把握するようになっている。そういう仕組みである。こうした様々な活動を通じて、1980年代、90年代には、我が国は世界最高の長寿国になりました。

他方、近年、別の課題が出てきている。生活習慣病、脳の病気が、栄養バランスが悪かったことなどから問題となっている。これに対しては、健康日本21という施策を展開している。具体的な10年後の目標を掲げて、達成に向けて何をすべきかを謳っているところである。この仕組みの中では、PDCAサイクルに内容を評価することを行っている。毎年、全国調査を行っているが、健康日本21のPDCAサイクルで評価することにより新たな施策を展開すべきか検討している。更に専門職の養成、栄養士、管理栄養士の要請に取り組んでいる。90年代からWHOは健康寿命を提言しているが、健康寿命は日本は常にこの20年間No.1であった。日本の経験、知見を世界に展開していきたい。



山田英也 JICA（国際協力機構） 上級審議役

アフリカにおける栄養関連の取り組みを紹介したいと思います。1ページ目は、食と栄養のアフリカイニシアチブ、IFNAである。一昨年、TICADVIで、安倍総理から打ち上げて頂いた日本発のイニシアチブで、アフリカに於いて、栄養関係の知識、技術の普及や人材育成などを行う事を内容とする。

IFNAは4つの特徴を挙げている。1) 首脳レベルのコミットメントのもとに行われていること、2) 政府と一体となって人間の安全保障のコンテキストの中で行うものであること、3) JICAだけの取り組みでなく、国際社会、国連機関、国際金融機関、SUN等NGOとも協力、4) 栄養であるので、いろんなセクター、農業、保健、水、衛生、教育などマルチセクター取り組み、の4つの特徴がある。

2ページ目は、現場で既に行っているIFNAと関連する取り組みの事例。事例1は、JICAで青年海外協力隊という形でボランティアが世界各地に散っている。栄養改善の草の根の取り組みで、栄養改善パートナーという組織を作っており、既に350人規模、現場のレシピなどを作成している。事例2では、ウガンダで日本でやっていた生活改良普及員の取り組みを参考にして栄養食習慣の指導。最後に、ガーナの普段縦割りのなかで仕事している農業、保健関係者が一緒に日本に来て頂いて、スーパーで栄養表示、学校給食の現場を見ていただく。今後とも政府と一体となって、マルチセクトラルな取り組みを実施していく。



栗脇啓 公益財団法人味の素ファンデーション シニアアドバイザー

味の素に出向し、味の素ファンデーションを作った。これは、味の素の CSR 事業を公益財団に移し、ガーナでのココプラス事業、ベトナムの栄養士育成事業、国際 NGO などへの栄養事業に関する助成などを実施している。去年、味の素および味の素ファンデーションとして、一つ目に味の素ファウンデーションの設置、もう一つは、味の素独自の栄養ポリシーを策定、宣言しています。そしてもちろん、2020 年の栄養サミットに向けて、このポリシーに基づいて協力していきます。

日本の強みを発信していく必要があります。食育、栄養士のその中での実践活動、母子手帳、食事の長寿への影響、そのちゃんとした発信と理由を発信し、アピールしていきます。



(司会) 木原誠二 SDGs 外交議員連盟事務局長

皆様ありがとうございました。それでは、UNHCR 議連の猪口先生にご発言をお願いいたします。



猪口邦子 UNHCR (国連難民高等弁務官事務所) 議員連盟事務局長

発言の機会に感謝します。これまでの議論を踏まえ、2 点を指摘したい。第 1 点は、省庁、公的機関、市民社会による組織的で一致した努力が重要ということ。第 2 点は、食育である。即ち、食育、即ち、食べ方を教えることである。幼児の死亡率を低減する。女子の能力が重要である。ここで、スローガンとして「Eat well, Live well, Live long」を提唱したい。皆さんは Live long の国におられる。

日本は、SDGs 支援との関係を持っており、自分は WFP のサポートメンバーもしており、与野党を問わず議連として努力していきたい。



(司会) 藤末健三 世界の子どもたちのためにポリオ根絶を目指す議員連盟事務局長

木原誠二先生が所用のためにご退室されました。司会、かわりまして私、藤末健三が務めます。

本日は、参議院の渡辺先生、宮内秀樹先生がご参加になっています。ありがとうございます。宮内先生には、簡単にご挨拶申し上げます。



宮内秀樹 2020年東京オリンピック・パラリンピック推進議員連盟事務局次長

自民党の衆議院議員の宮内秀樹です。2020年オリンピック・パラリンピック推進連盟の事務局次長をしている。国際栄養とオリンピックというテーマで議論が出てきているのは大変嬉しい事。国際社会として果たしていく必要があるSDGs達成に向けては、スポーツの重要性は大切である。スポーツの持つ力は大変偉大である。スポーツをする、見る、支えることにより、豊かな社会を作り、そして世界平和を目指すのがオリパラである。

そのスポーツの持つ力、魅力を支えているのが栄養だと思っている。適切な栄養があつてこそ強靱な肉体ができ、適切な栄養があつてこそ素晴らしい精神を宿ることができる。この基本に立って、我が国も、2020年に栄養サミット、安倍総理が発表されたが、このサミットに向けて我々も具体的な努力を引き続き進めていきたい。栄養へのPositiveな連鎖が、この世界を変えていくと信じている。適切な栄養を子どもたちにしっかりと与えて、誰一人取り残さない平和な世界を築くその一助となるように東京オリパラは努力していきたい。



(司会) 藤末健三 世界の子どもたちのためにポリオ根絶を目指す議員連盟事務局長

皆様ありがとうございました。それでは、山東昭子国際母子栄養改善議員連盟会長から閉会挨拶をお願いいたします。



(閉会挨拶) 山東昭子 国際母子栄養改善議員連盟会長

皆様、今日お集まりの方々が、世界の子どもたちの栄養改善のために長らく考えてくださったことに心から感謝する。世界中の子どもたちが、様々な国と国との政治情勢、あるいはテロ行為、いろんな形でひずみが生まれ、難民にも指定されない不幸な子どもたちも沢山いる状況。

そのために、今日お集まりの方々が、大いに議論し、なお一層、本当に恵まれない子どもたちの命のため、これからも一緒に仕事をしていくことは、本当に尊いことである。日本は、そういう意味で子どもの時からの食育環境を大切にしながら、なお一層皆様方とともに職の中で世界のリーダーとしてやっていきたい。これからも皆様方のなお一層のご協力をお願い申し上げ、閉会の辞としたい。皆様ありがとうございました。



(司会) 藤末健三 世界の子どもたちのためにポリオ根絶を目指す議員
連盟事務局長

本日は誠に忙しい中ありがとうございました。

以上

※発言者の確認を得たものではありません。



最終校正：日本リザルツ 小平 2018年2月20日

議連合同による栄養シンポジウム

適切な栄養をすべてのお母さん、子どもたちに！交流会

開催日時：2018年1月25日 13:00～

交流会司会：今井絵理子：国際母子栄養改善議員連盟事務局次長

挨拶：高野光二郎：WFP 議員連盟会長
渡辺美知太郎：WFP 議員連盟事務局長
牧島かれん：国際母子栄養改善議員連盟事務局次長
牧山ひろえ：ポリオ根絶を目指す議員連盟事務局次長
逢沢一郎：国際母子栄養改善議員連盟副会長
UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）国
會議員連盟会長 世界の子どものためにポリオ根絶を
目指す議員連盟会長
日本・アフリカ連合（AU）友好議員連盟会長
グローバルファンド日本委員会
議員タスクフォース共同幹事 日露友好議員連盟会長
国際人口問題議員懇
談会会長代行 ワクチン予防議員連盟副会長
国際連帯税創設を求める議員
連盟副会長 ストップ結核パートナーシップ推進議員連盟
(順不同)

